

2010（平成22）年度在宅医療助成完了報告書

「難病乳幼児の在宅ケアを支援する人材養成」

申請者名 上島 隆秀

所属機関・職名 九州大学病院・理学療法士

所属機関所在地 福岡県福岡市東区馬出3-1-1

提出年月日 2011年7月22日

1：はじめに

申請者は、難病疾患を有する乳幼児に対して、呼吸ケアや手足の柔軟性維持改善のための理学療法を実施している。入院中の理学療法が大半であるため、児の呼吸・関節柔軟性・発達支援を実施する機会は限られる。そのため、家族に行ってもらおうことを考えたが、十分な知識・技術を有していなかった。そこで、今回の申請となった。

2：研修会参加

平成 22 年 9 月 18～20 日、静岡呼吸リハビリテーション研修会に参加した。研修会は、3 日間の合宿形式で行われた。参加者は約 120 名、理学療法士が大半であったが、看護師、作業療法士、言語聴覚士も参加していた。

スケジュールは、1 日目に講義、2 日目に実習、3 日目にディスカッションであった。特に 2 日目は、参加自由のナイトセミナーが 19 時～21 時まで開催され、長時間にわたっての充実した実習が行われた。

小児呼吸理学療法の講義・実習では、胸郭拡張手技や側臥位を主体とした姿勢管理などの知識・技術を習得することができた。在宅ケアにケア支援に向けての知識として、姿勢管理の重要性、胸郭圧迫ではない呼吸介助手技などを習得した。古い知識・技術のみ有する申請者には新鮮であった。今後、習得した知識・技術を臨床において活用してゆきたい。

平成 22 年 11 月 28～30 日、第 18 回ベビーマッサージ・ティーチャートレーニングコース in 東京（ベビーマッサージ協会主催）に参加した。参加者は約 45 名、助産師や保育士が大半であった。講師はイギリスの理学療法士ピーター・ウォーカーであり、30 年以上の実績と世界中に 1 万人以上の受講生がいるようである。

内容は、母子愛着やタッチ、ベビーマッサージの重要性に関する講義、生後すぐから行える導入マッサージおよび顎が安定して行う発達支援のマッサージ実技などであった。ベビーマッサージの目的は、乳幼児の呼吸機能・関節の柔軟性・筋力を高めることであると説明された。乳幼児への働きかけとして玩具を使うことがあるが、ベビーマッサージを行うことで、玩具へのリーチが行いやすくなりモチベーションも高まりやすいという説明もあった。また、乳幼児虐待についても取り上げられた。

今後、ダウン症児や脳性麻痺児などの発達支援や家族指導に役立てたいと考える。

3：勉強会（院内伝達講習会）

平成 23 年 1 月 25 日、申請者の所属する九州大学病院において、習得したベビーマッサージ技術の勉強会を開催した。対象は、リハビリテーション部・周産母子センターのスタッフである。難病乳幼児、小さく生まれた赤ちゃん（早産・低出生体重児）に対するフォローアップの一つとして、ベビーマッサージ指導も行われることが期待される。



院内伝達講習会の様子（ベビーマッサージ用人形を用いて説明する申請者）

4：臨床での適用

難病乳幼児の理学療法において、今までは関節可動域運動を中心に行っていたが、今回の助成により習得したベビーマッサージ技術を行えるようになった。そのため、痛みを和らげながら、柔軟性を向上させ、関節可動域運動を行うことができるようになった。また難病乳幼児の保護者に指導を行うことができた。

難病乳幼児の呼吸リハビリテーションにおいて、これまでは10年以上間に修得した技術を行っていた。今回の助成により新たに習得した呼吸理学療法技術（胸郭拡張手技）を行うことができた。

●● くん呼吸リハビリ

仰向けでの呼吸介助(スクイーピング)

呼気に合わせて胸郭を動かします。軽い圧迫でも十分に動きます。



側臥位での呼吸介助(胸郭拡張手技、スクイーピング)



呼吸理学療法指導用資料（個人情報保護のため、報告書作成用に人形を用いて撮影）

5：まとめ

ベビーマッサージは治療者ではなく親が行うことが重要である、と講師のピーター・ウォーカーから説明を受けた。難病乳幼児のケアは医療者だけでなく、家族も行うことが重要であり、ケア導入のきっかけとして、ベビーマッサージ活用は貴重である。

2011年5月22日 地域で暮らすための医療的ケア研修事業「まいど！医療的ケア」(人工呼吸器をつけた子の親の会 バクバクの会主催)に参加した。病院外で人工呼吸器使用者に接する機会が少ないため、非常に貴重な機会となった。今回の助成申請では、身体ケア技術を習得するという内容であったが、今後は、環境調整や社会参加援助にも介入してゆきたい。

6：今後の予定

過去、勇美記念財団からの助成により習得したリンパ浮腫治療技術と、今回習得した呼吸リハビリテーション技術・ベビーマッサージ技術を活用し、難病乳幼児ケア支援をさらに充実させたい。今回の助成により習得した知識・技術について目標にしたい表現に出合った。「きれいな肺、やわらかい体」(「重い障害を持つ赤ちゃんの子育て」より引用)である。この表現を達成できるように今後もいろいろな知識・技術を習得したい。

7：おわりに

今回、難病乳幼児の支援技術・知識が向上し、早速、担当している患児のケアに活かすことができた。1人1人を大切に、今後もこのような支援を継続してゆきたい。

今年は、節電対策を考慮しながら、マットレスの熱こもり対策、褥瘡対策も考えなくてはならないという新たな課題が生まれてきた。リハビリの立場からできることを、環境調整も含めて、在宅医療支援のための協力について考えたいと思う。

8：謝辞

今回の研究テーマを遂行できたのも、公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成によるものである。勇美記念財団に深く感謝する次第である。

参考資料

亀井智泉「重い障害を持つ赤ちゃんの子育て」、メディカ出版、2008年